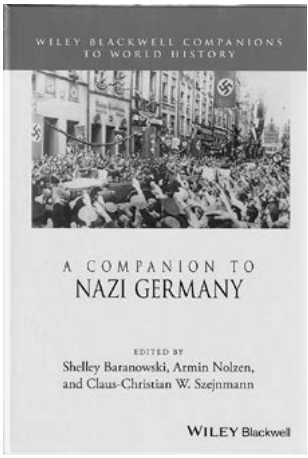


# キラン・K・パーテルのナチス教育研究： 「教育・学校・キャンプ」(2018)

Kiran Klaus Patel: „Education, Schooling and Camps“ (2018)

小 峰 総一郎

目 次	
<p>1. はじめに</p> <p>2. パーテル：「教育・学校・キャンプ」概要</p> <p>    (1) 序 論</p> <p>    (2) 先行時代理想の継承とナチスのアプローチ</p> <p>    (3) ナチス教育における排除と包摂     [ナボラ・オルデンスブルク城・アドルフ・ヒトラー校；ヒトラーユーゲント・国家労働奉仕団]</p> <p>    (4) キャンプ (camp) [= Lager]：     要の機能</p> <p>    (5) 役者たちとその策略の場     [ヒトラー、ルスト、ローゼンベルク、ゲッベルス]</p> <p>    (6) ナチス教育構造     [教育構造図： クリーク、ベンツェ、ボイムラー]</p>	<p>    (7) 全体主張 vs. 実施現実</p> <p>    (8) ナチスの企図なぜ受容</p> <p>    (9) 長期的作用</p> <p>3. キラン・クラウス・パーテルとナチス教育研究</p> <p>4. 文 献</p>
	
	<p>『ナチスドイツ・ハンドブック』(2018) 表紙</p>

## 1. は じ め に

「なぜ文明国ドイツにヒトラー独裁政権が誕生したのか？」

「ドイツ国民はなぜ独裁者に熱狂したのか？」

すぐれたドイツ現代史の研究者、並びに練達のドイツ文学研究者二氏の近著帯タイトル、副題はこう問いかける<sup>1</sup>。私たち日本人には、ドイツといえば文明国、ドイツ人といえば合理的理性的な人間というイメージがある。それがなぜあのユダヤ人600万人を虐殺しヨーロッパを戦場に変えた独裁者ヒトラーを誕生させ、支持したのか——と。そこには当時ドイツの抱える深い闇と、それを脱出する夢をナチスが具体的に提示し国民にそれを「主体的に」選ばしめたということがあったのではないか。

冒頭の問いは〈教育〉に置き換えて問われる必要がある。すなわち、ワイマール時代の児童尊重、国際主義、平和主義のドイツの教育がなぜかの偏狭なナチス人種学に基づき、欧州にアーリア民族（ドイツ人）の強大な「ドイツ」の建設をめざす〈ナチス教育〉に取って代わられたのか、ドイツ国民はなぜにこの〈ナチス教育〉を推進したのか——と。そこにはドイツ教育の構造的な問題と、そこからの脱出展望をナチスが具体的に提示し〈ナチス教育〉を国民に「主体的に」選ばしめたということがあるのではないだろうか。

私は元々ドイツ・ワイマール時代の「新教育」Reformpädagogikを研究して来た者である。「新教育」とは、「生活による教育、個性の尊重、自発学習の重視、自治の訓練、社会性の重視、男女共学、国際協調」を理想とし（「世界新教育連盟」（Ligue internationale pour l'éducation nouvelle, 1921）の《指標》）、人間の豊かな発展を援助促進する教育だった。ドイツ国民はなぜこの「新教育」から、人間の価値を否定する〈ナチス教育〉に方向転換し、これに自己投企して行ったのだろうか。私は近年「ナチス教育」について調べ、それを『ナチスの教育——ライン地方のあるギムナジウム——』（学文社、2019）として刊行した<sup>2</sup>。その作業を通して私は、上記問いへのヒントがナチス「ラガー教育」にあるように感じていた。すなわち、

①第一次大戦敗北後に誕生した「ワイマール共和国」は、経済的・政治的・社会的困難の下にあり、共和国に反対する勢力、現実の苦境に呻吟する人々はドイツ民族主義運動によってこの苦境を脱そうとした（「民族共同体」（Volksgemeinschaft）論）。ヒトラーはこのドイツ「民族共同体」（Volksgemeinschaft）への教育、すなわちそれまでのドイツの個人主義・教養主義・普遍主義の教育を超え、「ドイツ国家」を我がこととし、これに一身を捧げる教育を目指した（〈ナチス教育〉）。

②〈ナチス教育〉は個人主義・人文主義・主知主義の〈学校〉教育を超える〈社会〉全体での教育であり、「民族共同体」の一員としての〈ドイツ人〉形成をめざす「鍛錬」ないし「錬

1 石田 勇治『ヒトラーとナチ・ドイツ』、講談社、2015；池内 紀『ヒトラーの時代』、中公新書、2019（氏は2019年8月30日逝去）。

2 小峰 総一郎『ナチスの教育——ライン地方のあるギムナジウム——』、学文社、2019。

成」としての教育（そのの頂点に軍隊を置く）である<sup>3</sup>。教育の方法は、身体・心情・ナチズム志操形成を核とする擬似軍隊的な錬成教育＝「キャンプと隊列 („Lager und Kolonne“) の教育」に依っている。これによって形成される小「民族共同体」は、大「民族共同体」（＝アーリア民族（ドイツ人）の「ドイツ」と不可分一体のものであり、若者は党（ナチ党）と国家を「自分の集団」、自身と不可分の存在としてこれに自己投企して行く。彼らは自ら進んで「ナチス人間」となって行ったのである。

③「キャンプと隊列」の「ラガー教育」は、学校教育にとどまらず、職業・生活・労働諸集団での教育（何よりも「教員ラガー」の教育、法務専門職、医師・助産婦の職能教育等々）と結合し、これら集団は、ラガー教育によって成員を自覚的にナチス帝国に一元化統合した。さらに一般市民・労働者・青少年・婦人・女子等もあまねくナチス団体に組み込まれ、それら団体（クラスはそれら「ラガー」を80種類以上挙げている）が行なう「ラガー教育」は、成員をこの小民族共同体に強固に結びつけ、彼らを自律的自覚的にドイツ民族共同体＝ナチス第三帝国に統合したのである<sup>4</sup>。

このように、「普通の」市民、若者たちが「自ら進んで」〈ナチス教育〉に共感・一体化する共同体装置が「ラガー」(Lager = キャンプ camp) だった<sup>5</sup>。したがってこの〈ナチス教育〉の究明

3 アドルフ・ヒトラー (Adolf Hitler: 1889-1945) は、ランツベルク要塞拘留所で執筆した著書『わが闘争』(Hitler, Adolf: Mein Kampf, Bd. I, 1925; Bd. II, 1927.) において国家社会主義運動における教育を次のように定式化した。(以下の引用はアドルフ・ヒトラー、平野 一郎/将積 茂訳『わが闘争』下、角川文庫、1973、による。)

「民族主義国家の教育原則 ……民族主義国家は、……全教育活動をまず第一に、単なる知識の注入におかず、真に健康な身体の養育向上におくのである。そのときこそ第二に、さらに精神的能力の育成がやってくる。だがここでも、その先端には人格の発展、とりわけよるこんで責任感をもつように教育することとむすびついている意志力と決断力の促進があり、そして最後に初めて学問的訓練がくるのだ」。(p. 61)

「スポーツの価値 学校そのものは、民族主義国家においては、身体的鍛錬のためにきわめて多くの時間をさかねばならない。……」(p. 63)

「最後、最高の学校としての軍隊……民族主義国家においては、このように軍隊はもはや各人に進めや、止まれ、を伝えるのではなく、祖國的教育の最後、最高の学校とみなされる」。(p. 68-69)

4 Vgl. Andreas Kraas: „Den deutschen Menschen in seinen inneren Lebensbezirken ergreifen — Das Lager als Erziehungsform, 2011.“ In: Klaus-Peter Horn/Jörg-W. Link (Hrsg.): Erziehungsverhältnisse im Nationalsozialismus. Bad Heilbrunn: Klinkhardt, 2011. S. 314-317. [Kraas (2011)]; 小峰総一郎「ラガー (Lager) — ナチス「キャンプと隊列の教育」の展開—」『中京大学国際教養学部論叢』第10巻第1号、2017/10、参照。

5 「ラガー」(Lager = キャンプ)とは元々、若者が都市の学校・家庭を離れ田園で行う集団宿泊実習であった。「学校田園寮」(Schullandheim)で行われた「民族政治科実習」(Nationalpolitischer Lehrgang)がその典型であるが、そこではギムナジウム(男子中学・高校)の上級生徒たちが約2週間、教師・同輩(ヒトラー

には「ラガー」(Lager = キャンプ camp) の解明が不可欠である<sup>6</sup>——前著刊行後、私はそのように感じ、いくつかの周辺的研究に取り組んできた<sup>7</sup>。その過程で私はこの度、件(くだん)の〈ラガー教育〉を軸にして〈ナチス教育〉を捉えようとする研究を英文文献に見出した。それが今回紹介するキラン・K・パーテルの論文「教育・学校・キャンプ」(2018)である<sup>8</sup>。

キラン・K・パーテル：「教育・学校・キャンプ」

シェリー・バラノウスキ他(編)『ナチスドイツ・ハンドブック』アメリカ合衆国 ニュー・ジャージー州 ホーボーケン：ワイリー・ブラックウェル社，2018年，pp. 181-197.

Kiran Klaus Patel: „Education, Schooling and Camps“

In: Schelly Baranowski et. al. ed.: A Companion to Nazi Germany.

Hoboken, New Jersey, U. S. A.: Wiley Blackwell, 2018, pp. 181-197.

私はナチス教育研究を進める中で、特にクラスの「ラガー教育」研究には惹きつけられていたのが<sup>9</sup>、「ラガー教育」を中心として〈ナチス教育〉の全体構造(意図、リーダー、ナチス教育機関、心理・主体化への注目〈自己動員〉、前代との「連続」・「継承」、達成点と未達成点、内部矛盾等々)を解明したパーテルの論文は、これまでの多くのナチス教育研究には見られない出色のものと受け止めた。同書の視点を筆者は次のように述べている(大要)。

(本書の視点)：これまでの伝統手法とは異なる。

||

①それまでの教育論，教育実践との連続性に注目

---

ユーゲント生を推奨)の指導下に規律化された生活を展開し、野外実習(Wanderung)、郷土・自然学習、スポーツ・文化活動、ナチズム学習等に取り組んだ。小峰「ライン地方のあるギムナジウム(3)」[民族政治科実習]『中京大学国際教養学部論叢』第8巻第1号、2015/9、参照。

ギムナジウムでの「民族政治科実習」は試行3年で突然終わったが(1933-36)、「ラガー」はその後社会一般に拡大され、ヒトラーユーゲントや若者・生徒学生、職業グループ、一般市民、婦人女子、障害者や退職者、ナチ党幹部にまでわたり組織された。(小峰「ラガー(Lager)——ナチス「キャンプと隊列の教育」の展開——」、参照)

- 6 その際ナチスの周到な戦略、プロパガンダを見落とすわけにはいかない。石田勇治『ヒトラーとナチ・ドイツ』、講談社、2015、参照。
- 7 小峰「ナチス教員連盟(1929-1943)について」『中京大学国際教養学部論叢』第12巻第2号、2020/3；同「ナチスの学校田園寮(1933-1945)」『中京大学教養教育研究院論叢』第1巻第1号、2020/10。
- 8 Kiran Klaus Patel: „Education, Schooling, and Camps“. In: Schelly Baranowski et. al. ed.: A Companion to Nazi Germany. Hoboken, New Jersey, U. S. A.: Wiley Blackwell, 2018, pp. 181-197.
- 9 注4、並びにKraas, Andreas: Lehrerlager 1932-1945: politische Funktion und pädagogische Gestaltung. Bad Heilbrunn: J. Klinkhardt, 2004 [Kraas (2004)], 参照。

②第三帝国内部での不調和、コンフリクト

③普通の市民（ordinary citizens）の役割

——抵抗者、排除された者 vs. 第三帝国教育の信奉者（これは両性について言える）

④自己動員（self mobilization）——体制のトップダウン方式よりはるかに影響力大。

——ドイツ [の一般] 人がナチズム価値社会の一部となった事実は、多くの場合、特別の教育体制よりも遙かに重要であった<sup>10</sup>。

「教育・学校・キャンプ」（„Education, Schooling and Camps“）なるタイトルに惹きつけられて私は本書を紐解いたが、通読してまさに「目から鱗が落ちる」という思いであった。そこで以下、パーテルの〈ナチス教育〉研究を要約整理して紹介することとしたい<sup>11</sup>。

## 2. パーテル：「教育・学校・キャンプ」概要

### （1）序 論

#### 1. ライヒェンベルク演説（ヒトラー、1938.12.2）

●チェコ、ズデーテンラントをこの度併合したナチスドイツ総統ヒトラーは、1938年12月2日、風光明媚なライヒェンベルクで帝国の若者の教育につき、次のように演説した（大要）。

「若者が学ぶべきは、ドイツを思いドイツ人として行動することである。

10歳でわが組織に入った少年少女は、…その4年後ドイツ幼年団からヒトラーユーゲントに加入して更に4年学ぶ。その後我々は若者を、かつて階級とか特権階層とかを作り出した者達の手には、絶対に渡さない。代わって彼らを直ちにわが党に、ドイツ労働戦線、突撃隊・親衛隊、国家社会主義自動車軍団等々に入れるのだ。…そうすれば彼らは、生きている限り二度と自由は望まない（拍手喝采）。彼らはそれを喜びとするのである。」

#### 2. 本書の視点

##### ヒトラーの演説

——教育（広義の）とはナチスにとり中心的関心

↓

本演説：ナチスの教育把握に重要示唆与えよう

||

10 Patel, pp. 181–182.

11 以下はパーテル論文を私なりに要約整理したものである。Patel, pp. 181–197. 節題は原文。小見出し・番号・箇条書き、矢印・ゴチック体・注釈 [ ] 等は小峰。

明白な目標：新社会の新モラルを備えた新人間の創出



その実践の解明

——全年齢集団に向けた本演説の原理→ごく部分的にしか理解されなかった。



その理由

(従来の手法)：

主に体制の関心に注目



ナチス第三帝国の教育解釈

「教育：人々を操作する残忍な操縦」。「下劣な教化（インドクトリネーション）」

(本書の視点)：これまでの伝統手法とは異なる。



- ①それまでの教育論，教育実践との連続性に注目
- ②第三帝国内部での不調和，コンフリクト
- ③普通の市民（ordinary citizens）の役割  
抵抗者，排除された者 vs. 第三帝国教育の信奉者  
(これは両性について言える)
- ④自己動員（self mobilization）——体制のトップダウン方式よりはるかに影響力大。  
ドイツ [の一般] 人がナチズム価値社会の一部となった事実は，多くの場合，特別  
の教育体制よりも遙かに重要であった。

## (2) 先行時代理想の継承とナチスのアプローチ

### 1. 首尾一貫教育学なし——[仮構の] 民族共同体

- ナチズム——首尾一貫の教育理論・教育イデオロギーなし。



多くは先行時代の教育理想，実践に負う。

- 教育の究極目標——「民族共同体」(Volksgemeinschaft)



諸価値・本質のリメイク

（立脚点）

- ①人種主義，特に反ユダヤ主義
- ②鍛錬主義(discipline)，攻撃性(aggression)，優越性感覚(feeling of superiority)

## 2. 全分野化

- これ [民族共同体] が

↓

- ①学校教育に持ち込まれ [学校内]，かつ
- ②教育の全分野・全局面 [学校外の家庭，校外青少年教育，また労働，マスコミ，婦人等] に拡大される。

（例えばベンツェ（1936））

[Rudolf Benze: Nationalpolitische Erziehung im Dritten Reich. Berlin: Junker & Dünnhaupt, 1936.]

||

「第三帝国の教育は，どのような個人もそれに服従するよう努めている（民族共同体（Volksgemeinschaft）という要請を儀式化したのである。」（同書 p. 182）

## 3. 核心——体験教育学

- 第三帝国教育の核

——実践教育すなわち共有体験（shared experience <Erlebnis>）

⇕

抽象主義，自己学習，個人主義

- 抵抗，反対者——「民族共同体」に不適。排除。

- それ [民族共同体] のインパクト強化

↓

- ①市民を普通の社会環境から遠ざける。
- ②伝統的社会化・教育機関の役割減じさせる：家族，教会

↓

## 4. 知性主義（intellectualism）蔑視，体力（physical power）崇拜

- 「形式陶冶——時代遅れのブルジョワ文化，ユダヤ主義，ワイマール共和国の墮落秩序」

↓

## ●ナチスの賛美

——逞しい指導力, 絶対服従 (たとえ相互矛盾あるにしても)

## ●他のイデオロギー要素

——未解決のまま存置

## 5. 人種主義

## ●生物的決定論

——教育が果たす役割をつねに吟味 [= 指標]

(例) 女性: 一方で高評価 [労働参入など],

他方で人種学的規定。「母性 = ケアモデル」(伝統的女性観)

「総じてナチス教育は自己矛盾と不分明を伴い続けた。」

## 6. 帝政期 + 人種主義——教育思想, 教育実践

## ●帝政期との連続

——ナチス教育: 1933年以前のよく発達した教育思想と教育実践

→継承, 先鋭化させる

①軍国主義, ナショナリズム——帝政時代に教育に刻印

②生物的決定論, 人種主義——ゴビノー, チェンバレンなどに先例

↓

◎ナチス指導者に引き継がれ, 強化, 美化され一層ラディカル政策, 実践となる。

## ●他方弾圧された他の要素

——人間性, 理性

教育の自律性

新教育運動 (Reformpädagogik) (婦人運動, 労働運動と強く連関)

(結論)

①ナチス教育はそれ独自のものを備えたわけではない。

②しかし, 現存要素をラディカル化し,

③残虐性, 無慈悲性を実践化したのである。

(Horn (2011) 参照)



## 7. 教育，生活の境界あいまい化，伝統教育の取り込み

### ●教育の境界あいまい化

ナチスの教育

——①教育と ②他の社会的諸局面の間の境界を不安定化させた（destabilized）。

- a) 継起する教育機関〔学校体系〕の教育とそれ以外の教育〔(例) 党学校（ナボラ，アドルフ・ヒトラー校，オルデンスブルク城（NS-Ordensburg，ナチス騎士団城），青少年組織等——小峰）
- b) 教育者・被教育者が截然（せつぜん）区別された特殊相互作用の教育〔学校・大学〕とそれ以外の教育〔(例) ヒトラーユージェント，ラガー，国家労働奉仕団等における同胞教育・相互教育等——小峰〕
- c) 生活の中で特立された教育〔学校〕と他の社会的諸局面の教育〔家庭教育，生産現場・職能教育，地域・階層・年齢集団教育，軍教育，等——小峰〕

⇓

教育 = 第三帝国の全局面に拡大

∥

個人能力全体〔精神・身体・規律〕の訓練，教育

### ●伝統的教育形式

——新規教育機関の基本要素化

（例，ナチス自動車連盟〈NSKK〉のような害のない機関含め）

∥

ヒトラーのライヒェンベルク演説にある広大，鵠（ぬえ）的な教育理解表わす

## 8. ナチスの直面した旧教育

### ●旧教育：多様

——1933年のドイツ教育：教養主義で極端に多様化。連邦制で国としての統一学制なし。国よりも邦（ラント）

↓

基準も実際も強度に異質

### ●市民社会の教育

——各種の邦（ラント）機能〔政治，行政，経済等〕と並び，教育は市民社会に大きな役割もつ

∥

（例）プロイセン〔最大邦（ラント）〕の宗派学校〔概数〕

・プロテスタント学校——29,000校

・カトリック学校——16,000校

●ワイマール時代

——実験主義, 左傾邦立学校多数



「進歩主義教育運動の前衛」(一学者の言)



ナチスは以上のすべてに挑戦した。

9. ナチスの挑戦

●ドイツ社会の作り変え (reshape) ——ナチス教育

①全世代を

——生徒, 学生, 教師のみならず, 将来の博士のような専門グループ⇒特殊イデオロギー  
コースに進学さす

[新設ナポラ, アドルフ・ヒトラー校, 教員養成大学 (Hochschule für Lehrerbildung: HLB) ほかに——小峰]

②全ナチ大衆グループ (成人グループ)

——明確に理論づけられた教育側面備える [ラガー]

- ・婦人——〈民族共同体〉(Volksgemeinschaft) 教育 [ナチス厚生団等]
- ・親衛隊 (SS) ——1933-1945の間数千名の教師を擁し, 高度の教育計画遂行
- ・軍リーダー——葛藤を抱えつつも, ナチスイデオロギストが掌握



ヴァルター・フォン・ブラウヒッチュ: 国防軍のイデオロギー強化めざす。

ドイツ教育システムへの軍の影響力拡大望む。

③若年層中心

——さりながら, ナチスの主たる努力は若人の教育

(理由)

- ・若者 = 未来の中心勢力
- ・最も可塑性あり
- ・接近しやすい [国民] 部分

(3) ナチス教育における排除 [exclusion] と包摂 [inclusion]

1. 排除

●二面对応

——ナチスのワイマール共和国教育システムへの対応

①排除 exclusion (Ausmerze)

②選別 [登用] positive selection (Auslese)

●①排除——既存の邦の教育 (state education system) をオーバーホール。中心：排除とテロル

②選別——人種的に積極部分だけを教育可とする。

除去される者：劣等者 (ユダヤ人, 左傾者, 信頼できぬ教師)

||

1933/34官吏任用法 (1933.4.7) にて排除

●「有用」判定教育者

——(例) 大学教師：大量排除 vs. 体制期待の候補者教育職創出 [教員養成大学創出ほか——小峰]

●宗派学校

——未来なし。父母に邦立学校就学圧力, プロテスタント校・カトリック校の改宗着手 [= 宗派共同学校 Gemeinschaftsschule 化——小峰]

||

ローゼンベルク (Alfred Rosenberg, 党のイデオログ)

「教会はナチス体制の主敵」

断種法 (1933.7.14)

●遺伝学, 人種学, 生産論者視点

——「無能力」生徒を国民学校 (若者の約 90% 就学) から補助学校へ転校さす

同校教師ら断種承認。その生徒一部を重度障害者施設送り → 安楽死執行

●ユダヤ人公学校 → 私立ユダヤ人学校化

差別化期以後の1938.11法令化 = 水晶の夜 (1938.11.9) の数日後

●1942——ユダヤ人生徒の就学禁止。強制収容所送致

同政策はその後, 多様な排除方策により拡大, ラディカル化

2. 選別——ナチ・エリート教育

●新学校創設——既存システムの刷新

順向政策の頂点——排除 (Ausmerze) 補完政策

||

選別 [登用], 積極的選別

①ナポラ (Nationalpolitische Erziehungsanstalt: NAPOLA, 民族政治教育舎 [小峰訳]) ——

1933から

- ②オルデンスブルク城 (NS-Ordensburg, ナチス騎士団城)——将来の党幹部校。1936から
- ③アドルフ・ヒトラー校 (Adolf-Hitler-Schule, AHS)——ナポラに似るが、より一層党そのものに焦点。1937から

●カリキュラム

——既存の知識技術に加え、ナチス体制の新科目：

プロイセンでは遺伝学 (vererbungslehre), 人種学 (Rassenkunde)

||

1933.9 から

●「ナチス教員連盟」(Nationalsozialistischer Lehrerbund: NSLB)

——①人種学による教師トレーニング

②算数から歴史, 物理, 動物学に至るナチス・カリキュラム支配

●帝国教育省 (国家教育省) (1934.5)

——[それまでの邦 (ラント) 自治に対し], 中央集権の帝国教育省創設

狂信的, 術学的文部大臣ルスト (ベルンハルト・ルスト Bernhard Rust) トップ

●教科書

——出版社各社, 直ちに新ナチス政治秩序に合致した教科書を用意

●基幹学校 (Hauptschule)

——田舎の才能ある生徒に国民学校以上の教育を用意

親の希望を顧慮せず

||

上記諸方策はすべてナチス目的に添い,

①既存機関へのコントロール, 並びに

②それらの再編へのコントロール増大,

を目指したものであった。

3. 併置から画一化 (一元化) へ

●他面の方策

古典的システムの即時, 完全掌握が困難な場合

↓

並行するイデオロギー団体創設 [し, のち一元化]

・ヒトラーユーゲント Hitlerjugend

・ナチス親衛隊 (SS)

ヒトラーユーゲント（Hitlerjugend: HJ）

A. ——1933以前に党の支援で設立



ナチ党の権力掌握後

- ・重要性獲得
- ・各分野で一元化

（好例）ヒトラーユーゲント（団員数）

表1. ワイマール共和国末の青少年団体団員数

(Patel, p. 185より小峰作成)

団体	団員数（概数）
ヒトラーユーゲント	40,000
各種スポーツ団体	2,000,000
カトリック青少年団体	1,000,000
プロテスタント青少年団	600,000
左派諸団体	550,000



・1933ナチス権力掌握後：1930年代半ば，ヒトラーユーゲントは強制加入へ [1936.12.1]

B. ——1933以後新設

①オルデンスブルク城（NS-Ordensburg, ナチス騎士団城 [1936から]）

——将来のナチス・リーダーのため，ロベルト・ライ（Robert Ley, 1890-1945, ナチ党帝国組織指導者 Reichsorganisationsleiter），ドイツ労働戦線（Deutsche Arbeitsfront, DAF）下に創設。

C. ——ナチスに添い根本再編

②国家労働奉仕団（Reichsarbeitsdienst: RAD）

——ナチスに沿い根本再編。ヒトラーのライヒェンバルク演説で言及



権力掌握後わずか5年で伝統教育諸機関の教育力を疑問視

[→ RAD をこれに取って代える——小峰]。

[1931.6.5 ワイマール共和国のブリューニング社会民主党政権は失業者対策事業として「奉仕勤労団（Freiwilliger Arbeitsdienst: FAD）創設。ナチスは政権掌握後これを同党下に一元化，1935.6.26「国家労働奉仕団」とする。同団はやがてアウトバーン建設，軍用道路・飛行場・鉄道建設など軍事と深く結合した準軍事組織となった——小峰]

#### 4. 幼児から取り込み

##### ●幼児から

——「教育」は通常大人または若者を対象とする。しかしナチス：幼時から始まる

##### ①ナチス厚生団 (Nationalsozialistische Volkswohlfahrt: NSV)

——新生児の親へのガイダンスから

幼稚園, デイケアセンター (託児所, Horte)

(NSV 幼稚園数)

表2. ナチス厚生団の幼稚園数

(Patel, p. 185より小峰作成)

年	NSV 幼稚園数 (概数)
1935	1,000
1941	1,500

##### ②学童集団疎開 (Kinderlandverschickung)

——子供の田舎への移住。特にナチス厚生団の手による

表3. 学童集団疎開 (Patel, p. 185より小峰作成)

年	学童集団疎開
1940まで	数十万人の児童を田舎へ
都市爆撃後	1,500父母と離れ縁者, 農家, 特別ホームへ疎開

##### ●そこにおける教育——ナチス理念の注入

完全なるナチス生活世界 (Lebenswelt) 創出が行われる——特別のシンボル, [生活] 様式, 価値, 体験

#### 5. 「教育」拡大, 多様化

##### ●ナチスの教育多様

——①職業訓練 (vocational training)

②学校教育 (schooling)

③身体性格訓練 (physical and character training)

||

殆どのナチス教育制度：これらすべての領域の中で積極展開 (たとえそれらすべてが, 元来教育目的のものでなかったにしても)

(例)

突撃隊 (Sturmabteilung : SA)——準軍事機能備える

国家労働奉仕団（Reichsarbeitsdienst: RAD）——1933年後の地位＝はじめ数年は職業創出と結合した教育

●伝統教育機関の価値づけ——優先度低い

（ヒトラー）『わが闘争』

・ 学問の教育——壮健，健康，性格陶冶に対し最低の価値づけ

↓

これのイデオロギー化——一般の理解とは異なる

∥

・ 社会ダーウィニズム，人種学理解の中において

→余暇：「自由」でなく⇔「教育努力深化の場」，「教育努力映し出す場」

↓

・ [この限りで]ナチスの教育理解——非人間性，暴力性に代わりさらに巧妙ではるかに効果的

↑

[従来の研究:] 概括的 [ステレオタイプの] 表面理解。それよりもさらに巧妙，効果的

#### （４）キャンプ（camp） [= Lager] —— 要の機能

##### 1. 新規機関の中心機能：キャンプ

●新規機関

——第三帝国の範例の役割果たす

∥

●そこでの教育形式

——キャンプ [ラガー: Lager]

●ナチス体制最大の唱道者ベンツェの弁

——「人間を丸ごと捉え込む」のを可能にするのがキャンプだ。（ベンツェ，1943）

●メルテルスの弁

——「キャンプはドイツの〈勝利行進〉の上にある（あった）」（メルテルス，1937）

●ナチスにとってのキャンプ

——体制の最もラディカルなユートピア：排除，選別の両局面において

## 2. キャンプ (camp) ——モデル：国家労働奉仕団の木製バラック

### ●キャンプ (camp) とは

——特殊な設置環境：暫定的・速成的・利用可。安価。可動式  
モデル：国家労働奉仕団の木製バラックから発達

### ●立地

——田舎。故郷から遠隔（地理的隔絶：効果大）

### ●内的（心理的）コントロール

——上からの統制でなく，衆人監視——自発的忠誠心

### ●〈内〉と〈外〉の分離

——監視塔あり⇌軍秩序に似る

||

キャンプの全体：非個人化，集団主義（パレード場，集団就寝）

## 3. キャンプ＝「民族共同体」の揺籃

### ●「民族共同体」(Volksgemeinschaft)

——キャンプは「新しい人間」を創造する「民族共同体」の土台

↓

### ●キャンプ生活

——「自然な体験」を伝える場（リーケ，1936）

||

血と魂イデオロギー：人種主義理想，身体壮健理想と結合  
また男・女区別を理想とする。

### ●分離キャンプシステム

——男女別々のキャンプで特化した訓練

女：養護，スポーツ，家事を目指す

男：身体訓練，準軍事訓練が教育とセットとなる

### ●準軍事訓練

——軍事化と戦争準備とが益々重要性を増す

||

「『イデオロギー的交戦状態』とされる中，国防軍（Wehrmacht）が屢々他の教育制度，教育実践に巧妙に造りあげられた。」（フェルスター，2008）



#### 4. ナチス・ユートピア

##### ●「キャンプ」多様

- ①強制収容所（Konzentrationslager: KZ）：民族共同体からの排除者迫害，最終解決
- ②労働教育ラガー（Arbeitserziehungslager）・青少年保護ラガー（Jugendschutzlager）：監禁施設（Schwarz, 1990）

∥

- ・共に，上記空間モデルと「民族同志」（Volksgenossen）のためのキャンプというレトリックを備える
- ・内部生活は各々大きく異なる

##### ●二種のキャンプ [同質性]

——これらいずれもが

- ①まず第一に，強制キャンプとして作られ，
- ②やがて，イデオロギー的には異なるも（違いあるが故に）

↓

純粹アーリア民族キャンプに改変

[2つのキャンプの同質性を物語る]

##### ●ナチス・ユートピア

——施設の同一性 [形式]

∥

[内容的] 同質性，すなわち個人と社会の作り変え

∥

ナチズムユートピアを表わしている。

### (5) 役者たちとその策略の場

#### 1. 主役は誰か

##### ●第三帝国の教育，学校分野

——主役は誰か？

##### ①アドルフ・ヒトラー

——一般に最高決定者とされるが，実際政策の場に関心なし

##### ②ベルンハルト・ルスト

——教育省大臣。自分の役割を挑戦者とみなす。

## ③アルフレート・ローゼンベルク

——学校、また大学の役割につき論争する。

## ④ヨーゼフ・ゲッベルス

——帝国文化室への大学教授協力、またプロ芸術家組織は彼の保護下。

∥

上記2名は屢々ルストと対立。個人的に憎悪も。

↑

これは、ナチス新規機関と前代から引き継がれてきた教育・訓練システムとの間の構造的対立と言える。

## 2. 権限重複、競争・競合

## ●権限重複→ライバル機関同士の激しい確執へ

↑ ↓

①ヒトラー——彼自身が主導的に重複を創出し、自らの権限を強化

②権限衝突——既存教育システムに対するナチスの不信

## ●対立の原因、結果

対立原因（単眼視はいずれも誤り）

①ナチス目標をめぐる戦い [意見相違]

②効率性原因論

↓

対立の結果

①分業の成立——（例）ルスト教育相とヒトラーユーゲント [シーラハ]

②政策の流動化（全体として。一般的に）——第三帝国目標の進化、発展へ

↑ ↓

逆の困難（帰結）

特殊「ナチズムの位置」確定困難へ

（理由）

①ナチスの中の意図多様（単純理由）

②前代の教育現実との継続性存在

↓

（結果）

固有のナチス体制とドイツ社会との間の区別不明瞭化

### 3. 男女別化

#### ●ナチス男女別化

——多様な仕方でも男女別化を政策とする

#### ●エリート教育：男子中心（男性中心）

##### ①オルデンスブルク城（NS-Ordensburg, ナチス騎士団城）

——男子志願者のみ〔正規〕受け入れ

女子：補助役に限定

（例）食事係、洗濯係

##### ②ナポラ（国家政策教育舎）

——(1941年) 全32校。うち女子用3校のみ

##### ③大学入学制限

——(1933年) 大学定員法

女子学生：有資格者〔アビトゥア合格者〕の10パーセント

##### ④ヒトラー『わが闘争』

——「女子教育の不動の目標は未来の母である」とする

### 4. 女性——地位変化

#### ●現実

——女性，受身の犠牲者ではなかった

↓

（重要な方法）

ヒトラー自身のその政策が，第三帝国の女性緊縛を解放

（例）

BDM（ドイツ女子同盟）：女性の親並びに他の伝統勢力〔教会等〕からの独立を促進

——それらがかつて保持していた役割〔部分補助役割〕よりも多くのものを

〔教会，女子教育，大学→教員，専門職においても〕

#### ●限定役割超える

——「未来の母」を超えて

##### ①BDM（ドイツ女子同盟），RAD（国家労働奉仕団，女性）：部分役割を超え，女性の新しい社会役割を完全ホストとして開く

↓

数千人のリーダー生まれる

||

新しいキャリアとなる

②大学入学制限

——戦争準備で犠牲強いられたが

↓

(現実) 1943-44大学生：約半数は女性 [女性拡大]

(cf. Rasse, Harvey, Grüttner)

(6) ナチス教育構造

1. ナチス教育構造とは

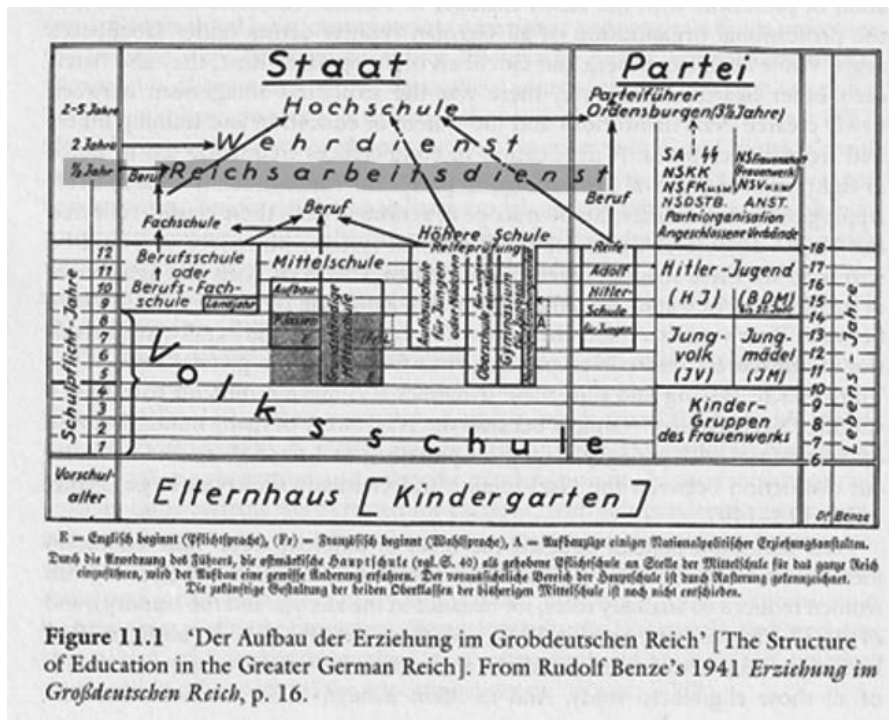


図1. R. ベンツェ：「大ドイツ帝国の教育構造」(1941年) (Patel, p. 188.)<sup>12</sup>

[上段マーカー部分 (小峰) が国家労働奉仕団]

●ナチス教育制度

——この図は R. ベンツェの「大ドイツ帝国の教育構造」(1941年)。だがこれには注意が必要。

12 図説明文1行目の“Gropdeutschen”は“Großdeutschen”の誤植であろう。Patel, p. 188.

## 1 教育理論よりも権力意志

### ●第三帝国の教育変化

——体系立った明確な教育理論に発するものではない

∥

時としてそれは、ヒトラーの着想から説明されたもの

### ●ヒトラー vs. 3人の教育学者

・ヒトラー：体制の絶対者。だが具体的政策プロセスを提示したわけではない。

⇕

・専門教育学者たち。これも過大評価すべきでない。彼らが体制に奉仕し、いくつかの教育機構は彼らによる。

①エルンスト・クリーク（Ernst Krieck, 1882-1947）

②ルドルフ・ベンツェ（Rudolf Benze, 1888-1966）

③アルフレート・ボイムラー（Alfred Baeumler, 1887-1968）

彼らが第三帝国に重要な行政役割を果たしたのは事実である。

・しかし、3人の知的寄与

——・ナチス諸機構を遡って吟味し意味づけたが、

・純粋に新アイデアを提示した訳ではない。

(Vgl. Giesecke (1993), Keim (1995), Hermann/Oelkers (1988))

## 2 ベンツェとナチス教育制度 [就中キャンプ (=ラガー), 排除, 選別 (エリートへの道)]

### ●〈除外〉施設とは意図せず

——ナチス諸制度（民族共同体から導かれた）

↓

〈排除〉の結果だけを意図した訳ではない

### ●RAD（国家労働奉仕団：Reichsarbeitsdienst）のような表面的には罪のない施設

→内部メンバーを厳しく監視。高度に人種主義化

⇓

（結果）教育機関による検査→一人の人間を「ユダヤ系」、「その他の政治的理由」により「共同体と相容れない者」と判別

∥

「アーリア証」なければ→「民族同志（Volksgenossen）」機関 [エリートへの道] への隘路→直ちにテロ、絶滅キャンプ [収容所] へ。

### 3 他 の 制 度 も 共 在 ， 不 完 全 性

#### ●「完全制度図」

——他制度も共在，不完全制度

(例) 成人教育，社会的労働を除外

また，ナチ時代12年で重大変化あり

#### ●「全年齢集団」

——多くの機構あるも，すべてを捉え切れていず

(収容力不足)

国家労働奉仕団 (Reichsarbeitsdienst: RAD) : 1935より男女強制

(男性) しかし2/3しか召集されず (1935)

(女性) さらに低い

||

・ヒトラーのライヒェンベルク理想——現実とは異なる。

・しかし戦時国防軍——各種ナチ組織を通して相当高く組織化された。(Vgl. Rass (2003))

### 4 権 限 闘 争

#### ●現実はさらに複雑

##### ①権限闘争あり

——ライバル機関相互の間で，  
 抜け道あり ] 体制の教育範囲減じる

##### ②教育目標

——第三帝国の他の目標 [政治，経済，軍事，文化] に対する十分な優先権を持ったとは言えず。

(例)

「アドルフ・ヒトラー校」: 計画より少数

「[オルデンスブルクの] 騎士ユンカー (生徒: Ordensjunker)」: どの入校グループも未来の第三帝国エリート用に熟考された多年教育計画を完遂することなし<sup>13</sup>。

13 オルデンスブルク城間のナチ党教育は，各城が次の重点計画に則るものとされていた：

①フォーゲルザング (Vogelsang) : 新体制の人種哲学 (ナチス人種衛生学)

②クレッシンゼー (Krössinsee) : 性格陶冶

③ゾントホーフエン (Sonthofen) : 行政・軍事・外交

「騎士ユンカー」(Ordensjunker, 同城生徒) は3城で行われる各1年の教育 (計3年) ——フォーゲルザングで始まりクレッシンゼー・ゾントホーフエンで終わる——を修了するものとされていた。(参照：「NS-Ordensburg」 <https://de.wikipedia.org/wiki/NS-Ordensburg> 最終閲覧：2022/02/26

③約束＝社会的流動性，中産層からの進学

——エリート校「アドルフ・ヒトラー校」，「ナポラ (NAPOLA, 民族政治教育舎)」で過大演出。

2. 結論

「社会作用」[流動性の実現] (階級融和)

——体制擁護論者のレトリック [体制論理のため＝流動化抑制論] で由々しい欠落 [中産層からの進学困難]

↓

●ナチス教育——欠陥だけであった。

(Vgl. Feller/Feller (2001), Schneider et. al. (1996))

(7) 全体主張 vs. 実施現実

●[以上から考えるべき第一のこと:] 理想と現実の区別が重要である。

1. 理想と現実

——ギャップあり

●ナチス

——ギャップ埋める努力するも困難

(例)

・RAD (国家労働奉仕団 (Reichsarbeitsdienst: RAD))

1938——ベーターゼン, 「教育目的と教育現実の調和」 謳うも虚構, プロパガンダ

●ナチスの全教育機関の中で

——自己の主張と日常現実の間に大きなギャップあり。

(例)

①「宗派学校」[の解消, 「宗派共同学校化」目指すも——小峰] 残存

(プロイセン) 宗派学校数

表4. プロイセンの宗派学校数

(Patel, p. 183より小峰作成)

年	宗派学校数 [プロテスタント, カトリック, 他。概数]
1931	45,000
1938	34,000

||

・ナチスの目標とする宗教教育改革，宗教授業改革は失敗，ないし「最終的勝利」後に延期されたのである。（Müller-Rolli (1999), pp. 109-117.）

## ②基幹学校（Hauptschule）

——学校体系中の重要校種とはならず。

||

「ナチス学校政策の失敗」（Ottweiler (1985), p. 250.）

## （結論）

一般にナチスによる学校教育・教授は，時としてその主張よりも伝統的なものだったのである。

## 2. 新規機関，新規事業

### ●新規機関

——ナチス創設の新規教育機関においては事情は幾分良好

↓

### ●[新たなる] 行政問題

——それらの急激な拡大 → 多くの行政問題生ず

#### ①[創設当初期]：変化甚大，体制忙殺期

——「教育」が多様な位置 [意味] をもつ初期体制数年

||

体制は屢々失業者を登用 [充当]

#### ②[体制確立，戦争準備期]：後期，完全雇用期・戦争準備期

——お役御免（exempted from work）グループの間での闘い，ないし教育目的をめぐる争いが屢々激烈化

## 3. 戦時期

### ●戦時後退

——「アリア民族」の教育という最大のユートピア要素は縮減

#### ①オルデンスブルク城（NS-Ordensburg, ナチス騎士団城）

——1939年にはその所期目標失われる

#### ②国家労働奉仕団（Reichsarbeitsdienst: RAD）

——戦争進行の中，「教育的作業」の大部分は継続不可能



③ヒトラーユエグント (Hitlerjugend: HJ)

——早くも1940年春には、フルタイムのユエグントリーダーの95パーセントが国防に従事

●学校制度改変

①帝国学校制度

——単純化。年限短縮

②エリート校「アドルフ・ヒトラー校 (Adolf-Hitler-Schule, AHS)」——繰り上げ卒業

・「総統ヒトラーは我々を前線で必要としているのだ。」(一生徒の感想, 1941年)。

(Feller/Feller (2001), p. 54)

↓

・軍務 = 教育の究極目標へ賞賛 (ドイツ, 西欧思想の上に)

「教育」のインフレーション

狭義の「学習」縮小

●キャンプ, 選別, ホロコースト

①変幻自在の「教育」キャンプ→強制労働と収容者に風景一変

(Patel (2006))

②特に1942年以後

——「民族同志」からの「選別」用財源 [教育資金], 及び帝国内のナチス教育政策

↓

挙げて戦争, テロ, ホロコーストへ向けられる。

4. 学童疎開

●他方, ナチス理想の存続, 拡大

——教育分枝の拡大あり, 特に学童疎開

●1940.9-1944秋

——850,000学童, 疎開キャンプへ

●合計200万人以上 (養家〈ようか〉) に預けられた子, 母との田舎疎開を含め)

——ナチス体制により移住

||

キャンプ宿泊, 体制コントロールが集団的に強化されたのである。

(Vgl. Kook (1997))

## 5. 占領地——更なる教育システム

### ●旧帝国領外の地

——ナチスの最大ファンタジー実験場と化す

(例)

アルザス——ゲルマン化

1940フランス降伏直後から

- ①学校：バーデン邦カリキュラム，教科書使用強制
- ②ドイツ語：地域の「母語」＝ドイツ語のみ
- ③追放：ユダヤ人，他地域出身フランス人＝「望ましくない者」

### 教育方策

- ①青少年団体——BDM(ドイツ女子同盟，Bund Deutscher Mädel)，ヒトラーユーゲント加入義務

- ②入学資格——これの加入なければ中等学校進学不可能

||

ドイツ全土の公式加入強制(1942年)に先立ち必須化

## 6. 東方苛烈

### ●東方——西方より更に苛烈

- ①ポーランド，ユーゴスラヴィアのゲルマン化不能諸国の子ども

——ドイツ送り，特別ホームへ

- ②誘拐児

——大よそ50,000名(実数不明)児童がこの役割[ドイツでのスラブ系児童のゲルマン化]のため誘拐，ナチ化教育に充てられる

- ③教授追放

——プラハ，シュトラスプールのドイツ大学で，非ドイツ人学者追放，強制収容所キャンプ送り，ポストはドイツ人教員が襲う

||

### (結論)

非ドイツ人に関して体制の学校，教育は人種学による排除政策

## (8) ナチスの企図なぜ受容

●[次に考えるべき第二のこと:] ナチスの計画は何故に受け容れられたかである。

## 1. ナチスの企図なぜ受容されたか

●それは第二の問いへの答である:

(問い)

- ①ナチスの教育企図, 矛盾・欠点がなぜ問題とならなかったか。
- ②ナチス教育が実際に重要視されたのはなぜなのか。

↓

- (1)排他的, 暴力的性質を多く持つ半面, [これらナチスの計画は] 実に魅惑的であった。
- (2)たとえ多くの教育機関が挑戦的な目標実現からは遠かったにせよ, 多くの連続的な教育構造は, まさにヒトラーがライヒェンベルク演説で述べたように, 畳み掛ける効果を持った。
- (3)さらに, 多くのドイツ人がナチス体制下の教育 [方法] に惹かれたからである。

a) この教育方法に於ては——

機械的学習, 闇雲の反復学習, 鞭打ちさえ存在するが,

b) 民族同志に向けた新鮮要素——

民族同志 (Volksgenossen) の相互交流をすすめる魅惑的な教育方法創出の企図が存在した。

c) 国民の琴線に触れる教育——

前代 [ワイマール時代] の革新的教育論を吸収統合。

(例)

生徒の実際経験の尊重, 同年齢者のリーダーシップ, 理論と実践を結合した知識 (例, 数学で代数学をミサイル弾道学と結合, 「無価値」な精神薄弱者維持にかかるコスト計算)

↓

多くのドイツ人はこれを気にせず。むしろそれを刺激的と受け止めたのだった。

(cf. リンク2011ほか)

## 2. 自分から, 情念的側面——内容に関して

●情念的内容物——

大人に, より好感度高い

ナチス理想 = ・二元論 (善と悪——マニ教的二元論備える)

- ・情念性
- ・ダイナミズムと参加

∥

これらは大人を惹きつけた。

⇕

若者たち——[大人に比し]「ナチズム」自体への惹きつけは少し。

しかし彼らは、体制の目指す価値心情は積極的に信奉した。

### ●ナチズムのルーツ

ナチズムと同値される思想のルーツ——大部分は、深いところでドイツ、ヨーロッパの風潮の中にあった。[千年王国, 神話, 反ユダヤ主義, 民族共同体, 等。小峰]

↓

[それゆえ]多くのドイツ人——体制内部の矛盾, 欠点は、むしろユートピア:「民族共同体」(Volksgemeinschaft)を実現しようとする, より強い動機とさえなったのである。

### ●自覚的動機

——最近の研究:①学校から大学 ②ヒトラーユーゲント, ドイツ労働戦線, SS(ナチス親衛隊)[に及ぶ]教育機関とその問題に関する大量研究の示すもの

∥

・ナチス目標への積極的自己動員(active self-mobilization) =これは、受動的トップダウン教育, インドクトリネーション[indoctrination 教化(洗脳)]よりもはるかに重要であった。

(cf. Reeken/Thießén (2013), Steber/Gott (2014), Bajohr/Wildt (2009))

## 3. エリートへの道。ナチス価値, 日常生活

### ●ナチス教育からエリートへ

多様なエリートへの道

- ①ナボラ(NAPOLA, 民族政治教育舎)生徒
- ②東方の「ドイツ女子同盟」(Bund Deutscher Mädel)
- ③「アーリア人」大学教授(解職されたユダヤ人教授職ポストの後任)

### ●ナチ的生活世界

教育, 学校のナチ化

「生活世界」(Lebenswelt)益々ナチス価値, ナチス行動様式となる。

（最近の研究成果）

「ナチス・リーダーと普通のドイツ人——新しいナチス倫理の協同創造」

### ●社会のナチ化

- ①日常生活が高度に政治化
- ②子供→親がそれに反対するようなら親を告発
- ③(卍) 鉤十字勲章，各種制服 [ヒトラーユーゲント，BDM，SS，SA 等]，勲章，歌——ナチス行動規範を作り出す。

(Gross (2010), Bialas (2014), Fritsche (2008))

### 4. 常時テスト——ナチ・エリート，民族同志

#### ①常時行動監視

——新ポストの行動スタイル



多くのドイツ人，ナチスの思考と行動に積極的自己投企  
体制エリート (SS (親衛隊)，NAPOLA (民族政治教育舎) メンバーのような) リクルート



特権性不安定→常時テストと結びつく



行動スタイル指標によるテスト→不合格とならぬ保証は何もない

#### ②劣等者 (inferiors)

——ドイツ人人口の10-30%，「劣等者」判定



これは [積極的自己動員と常時テスト不安] 二律背反

→体制の重要性，また稼働力ともなる

(Schneider/Stillke/Leineweber (1996), Bock (1986))

#### ③よき民族同志 (a good Volksgenosse)

——自身の価値証明



これらのすべてに因り [①積極的自己動員 ②常時行動監視 ③劣等者判定恐怖]

——多くのドイツ人，取り分けナチス教育システムを通り抜けた若者たちは1944/45までナチ

ス体制を支持したのだと言える。

## 5. 体制教育の批判者

### 常時テスト

#### ●体制教育への反発

——それにも関わらず、すべての者が上記のことがらを首肯したわけではない。

(例)『白バラ』学生パンフレット

「私たちの実り豊かな教育時代の大部分に、ヒトラーユーゲント、SA(突撃隊)、SS(親衛隊)は私たちに制服人、ナチス革命人、理性麻痺者化させようとしてきました。『イデオロギー教練』(weltanschauliche Schulung)というのが、鍛えられた思考や判断を霞のような空疎な言辞で窒息させる侮辱極まりない方法の名前です。ここで選ばれたリーダーが、将来ナチ党役員となり、神を冒瀆する鉛の心の・破廉恥な篡奪者・殺人鬼となるのです」。

||

- ・第三帝国時代の教育の負の側面を衝いたもの
- ・これは、第三帝国時代に、多数がそうだったにしてもすべてのドイツ人がナチス理想を賛美していた訳ではないことを物語る。

## (9) 長期的作用

### 1. ナチス教育分析

#### ●⚡(ハーケンクロイツ)下の学校、教育、キャンプの長期作用

——これの総括は難しい

#### ●(例) シェルスキーの場合 (Schelsky, 1957: ドイツ社会学者)

——「懐疑世代」分析

||

「懐疑世代」: 1920-30年代に生まれ、少年少女時代にナチス教育を受けた世代

・1945年の瓦解をラディカルに総括。彼らの個人自伝分析

①ナチスのユートピア構想を懐疑 ②戦後の民主主義ドイツを誠実に信奉

↑↓

シェルスキー自身: 半世代(10年)年長、数年前にはナチスに魅了された世代

↓

・被調査者の自伝分析→彼の発見 [ナチス教育懐疑, 戦後民主主義信奉]

→西ドイツでは真実。東ドイツではユートピア [ナチス理想] 否定, 社会主義の新理想信奉  
(Bude (1995), Ahbe (2007))

### ●1968年反乱

——ナチ期に根をもち, かつドイツの教育の深い結果たる親の「伝統主義」に対する若者世代の異議申し立て運動

∥

シェルスキー分析に求められる視点

### ●近年の戦争体験世代研究

A. 戦争そのもの+体制の教育→これら二つが彼らの社会化の中心ファクターだとするもの [戦時エリート教育へ]。

B. 戦争犠牲トラウマ →後継諸世代 [の社会化ファクター] の問題とするもの [敗戦後の社会化分析]

(例えば Bar-On (1995), Quindeau/Einert/Teuber (2012))

## 2. ヒトラー教育=負の遺産

### ●ナチス教育, その帰結

——ヒトラーのライヒェンベルク演説 (1938.12.2) 誤り

「そうすれば彼らは, 生きている限り二度と自由は望まない。」

↓

・第三帝国教育: わずか6年半後, 灰燼に帰する。その間の時期, ナチス教育が全体像を表現したことなし。

・だがそれは, 数百万の人々の生命に暗い影を落とす。負の遺産は戦後社会に及んだのである。

## 3. ナチス教育研究とキラン・K・パーテル

パーテルのナチス教育研究は, これまでの多くの研究が, 「ナチス=諸悪の根源」とでもいうようなアプリアリの前提のもとに「ナチス第三帝国の教育」は「人々を操作する残忍な操縦」, 「下劣な教化 (インドクトリネーション)」と断罪・解釈する謂わば「国民=客体」論であったのとは異なり, 若者・国民は〈主体として〉, 〈自ら進んで〉ナチス第三帝国に自己投企したとの立場をと

る。そのような心理形成の装置が取り分け「ラガー」とその教育（「キャンプと隊列の〈ラガー教育〉」）であって；そのモデルは国家労働奉仕団（Reichsarbeitsdienst: RAD）の田園孤立・木造バラックのキャンプ生活である；ナチスはこのように〈教育〉を〈民族共同体〉（Volksgemeinschaft）形成の社会運動に拡張したのである——「学校」での学習・個人の陶冶を超えて——とする。

これは私にとり、まことに斬新な視点であった。私はこれまで漠然と、ナチス教育は教育学論を欠く；しかし「キャンプと隊列の〈ラガー教育〉」という「形式」がナチス教育の「内容物」に取って代わっている、と解釈説明してきたが<sup>14</sup>、パーテル論文に照らすとき私の捉え方は極めて狭いものであることを思い知らされた（しかし一部は強ち的外れでもなさそうであるが）。いずれにせよパーテル論文は、今後のナチス教育研究にとり文字通り「ハンドブック」としての全面性、総合性を備えていると判断される。

ここでは私の関心に即し、「ラガー」（Lager = キャンプ（camp））、「教育」概念拡大と主体的な自己動員、およびパーテルの横顔についてコメントしたいと思う。

### （1）キャンプの意味

キャンプ（camp） [=（ラガー:Lager）]とは元々、本文にあるように「国家労働奉仕団（Reichsarbeitsdienst: RAD）」で行われていた団体生活方式である<sup>15</sup>。

それは、故郷から離れた田舎に立地し、メンバーがいつでも労働奉仕に出動可能な木製バラックでの集団宿泊だった。そのため暫定的・速成的で安価、労働作業の效果的達成を念頭に置いた編成である。

キャンプの生活は時間で規律化されていた。これはどの種類のラガーでもほぼ共通している。「ナチス教員連盟」の研修ラガーと学校田園寮の例を見てみよう。

表5. 教員用「ラガー教育」の実際（1935年）<sup>16</sup>

クールヘッセン・ガウにおけるラガー日課（1935年7月17日）	
6:00	起床, 早朝スポーツ, 洗顔, 部屋整理整頓
7:15	部屋点呼
7:30	旗パレード
7:45	朝食
8:15 - 8:45	講演「民族共同体生成とナチス国家におけるこれの意義」（党员, エルンデ）

14 小峰 総一郎「ライン地方のあるギムナジウム（6・完）」[ナチス教育学]『中京大学国際教養学部論叢』第9巻第2号, 2017/3, 参照。

15 Patel, p. 186.

16 Feiten, Willi: Der Nationalsozialistische Lehrerbund. Weinheim/Basel: Beltz, 1981, S. 309, Anm. 95.



9:00-10:30 講演「ナチス教育と教員」（党員・視学官 Dr. ブランク）  
 10:30-12:00 体操とゲレンデスポーツ  
 12:00 昼食  
 12:30-14:00 自由時間  
 14:00-15:30 講演「ヒトラーユーゲントとドイツ女子同盟」  
 15:30 コーヒータイム  
 16:00-17:30 射撃  
 17:30 講演「帝国思想を巡る戦い」（党員 フォン・レテル）  
 18:50 旗パレード  
 19:00 夕食  
 19:45 命令発布  
 20:00-22:30 自由時間  
 [22:30 就寝]

表 6. 生徒用「学校田園寮」日課（1935年）<sup>17</sup>

## あるギムナジウム学校田園寮の日課（1935.11.16-26）

7:00 起床  
 7:10 早朝スポーツ  
 7:35 旗掲揚  
 8:00 朝食  
 8:30 戸外散策  
 12:00 昼食  
 12:30-14:00 休息  
 14:00 スポーツ  
 15:30 コーヒータイム  
 16:00-17:00 学習  
 17:00-18:00 遊び  
 18:00-18:30 コンパス行軍  
 18:30 パン夕食  
 19:30-21:00 ゲレンデ練習、演劇プログラム  
 21:00-21:30 日誌記入  
 22:00 消灯ラッパ

早朝スポーツからラガーの一日が始まる。中庭に整列し寮旗の掲揚。これは、定められた様式で行なわれる神聖化された儀式である（学校田園寮では、ヒトラーユーゲントの典礼形式に倣っていた）。そして課業。一般に学習は短時間である。学校田園寮は国境地への設置が推奨され、他民族の脅威に晒されている国境地ドイツ民族の苦悩と生活を学び取る実地学習が重視された。教

17 König, Karlheinz: „Schullandheimbewegung und Schullandheimpädagogik im Griff des totalitären Staates (1933–1945)“. In: Verband Deutscher Schullandheime (Hrsg.): Schullandheimbewegung und Schullandheimpädagogik im Wandel der Zeiten. Hamburg: Verband Deutscher Schullandheime e. V., 2002, S. 110.

員ラガーでは、党員講師によるナチス人種学・地政学や「民族共同体」論の講演が多くを占める。

午後は遊び、スポーツ、そして次第に軍事スポーツが採用される(上記教員ラガーには射撃があり、学校田園寮ではコンパス行軍。他の学校田園寮では射撃、拳闘、有刺鉄線越えのような「国防スポーツ」が行われた)。

夕方は僚友同士の交流、文化芸術活動など。これらを通して体験者は互いを“Du”(「君」,「お前」)と呼び合い、小「民族共同体」の絆は深く強固なものとなる<sup>18</sup>。

このさながら軍の秩序に似た施設(それは大戦に従軍した「塹壕世代」にとってはまことに親しみ深いものであったろう)は、〈内〉と〈外〉とが完全に分離、生活全体がメンバーの相互監視の下にある。キャンプの生活は非個人化され、生活全体の集団主義化(起床から集団就寝までの宿舎生活、スポーツ・パレード・学習、わずかの文化活動)は、目に見える行動と共に心理・内面にまで及ぶ。この規律化された集団生活を通して「自然に」形成される内的(心理的)コントロールが、メンバーの「自発的」な忠誠心を育て上げる。

パテルはこのようなキャンプが「新しい人間」を創造する「民族共同体」の揺籃だとする。キャンプ生活の全体が「自然な体験」の場であって、それらを通して「血と土イデオロギー」、人種主義・地政学、身体壮健理想、男・女区別理想は若者の確信へと鍛え上げられる。ここはナチスの「ユートピア」。彼らは今や「民族共同体」(Volksgemeinschaft)の同志(「民族同志」Volksgenossen)となったのであり、その後実生活に戻ったならば、現実のドイツ社会を〈民族共同体〉に変革することであろう<sup>19</sup>。

## (2)「教育」の拡大

ヒトラーとナチスは「教育」の意味を拡大させた。ここに〈ナチス教育〉の魔力が潜んでいる。

ヒトは〈文化〉を身につけ発達する。人間社会の営みの中で蓄積・精錬された良質の〈文化〉を身につけて、ヒトは自分自身と社会を豊かにする。そのような文化伝達・文化生成の場としての〈学校〉をナチスは篡奪して、これを〈民族共同体〉形成の手段とした。この過程はまことに巧みである。

- ①「民族共同体」という教育目標が学校教育に持ち込まれ、かつ教育の全分野・全局面(学校外の家庭教育、校外青少年教育、また労働、マスコミ、幼児・婦人、等)に敷衍される。
- ②「教育」の境界のあいまい化——教育と他の社会的諸局面(文化、経済、労働、軍、等)の間の境界を不安定化させ(destabilized)、「教育」を第三帝国の全局面に拡大=個人能力全体[精神・身体・規律]の錬成、教育を目指す。
- ③「教育」概念の拡大、多様化——a) 職業訓練(vocational training) b) 学校教育(schooling)

18 小峰「ナチスの学校田園寮(1933-1945)」『中京大学教養教育研究院論叢』第1巻第1号、2020/10、参照。  
19 Vgl. Patel, pp. 186-187.

c) 身体性格訓練 (physical and character training) をナチスが一体的に統括し積極展開 (たとえそれらすべてが、元来教育目的のものでなかったにしても (例、突撃隊：国家労働奉仕団)。併せて伝統教育機関の機能を抑制<sup>20</sup>。

こうして「教育」を全社会運動に拡張したナチスは（「教育国家」化）、「教育」の頂点に軍を置き、訓練・錬成の教育を理想とする。このような「キャンプと隊列 („Lager und Kolonne“) の教育」が〈ナチス教育〉の本質を成すのである。

〈ナチス教育〉の唱道者ベンツェは「人間を丸ごと捉え込むのを可能にするのがキャンプだ」と述べた (ベンツェ, 1943)。この「人間をまるごと捉え込」んで行なわれる人間改変を、ベンツェはかつて「学校田園寮」に即して次のように定式化していた（「プロイセン学校田園寮」覚書〈大要〉）

.....

- ・生来のドイツの本質の自覚。これに加え、実行意志に形成すること ⇒ナチス教育
- ・過去＝個人上昇のみ。労働を厭う。世界観未確立：自由時代。ここには共同意志、並びに教育はない。
- ・共同体＝教えられぬ。体験するものである。
- ・ナチス教育学＝教育共同体と前線体験の上に＝これは郊外で達成するものである。

.....

ベルリン, 1935.4.15  
Dr. ベンツェ (文部参事官)<sup>21</sup>

### ①〈ラガー教育〉の拡大

私はこれまで、ギムナジウムの「民族政治科実習」(Nationalpolitischer Lehrgang) を調べ、これが小「民族共同体」(Volksgemeinschaft) を大「民族共同体」(Volksgemeinschaft) へ有機的に結びつける「キャンプと隊列 („Lager und Kolonne“) のラガー教育」の原型であるとした<sup>22</sup>。そしてこの「キャンプと隊列の〈ラガー教育〉」は中等学校での「民族政治科実習」に留まらず、一般の市民・労働者・青少年・婦人・女子もそれぞれのナチス団体に組み込み、それら団体が行なう「ラガー教育」は、成員をこの小民族共同体に強固に結びつけ、結果彼らをドイツ民族共同体＝ナチス第三帝国に統合したのである<sup>23</sup>。ナチス「教育ラガー」・「訓練ラガー」は、青少年対象のものにとどまらず ①大学教員を含む教員ラガー ②国家エリートの医者・医療関係者、司法関係者対象のラガー ③文化・スポーツ・芸術・国際交流関係者対象のラガー そして ④ナチ党関係者自体を対象とするラガー等々——と世代別、領域別に、そしてこれらが層的に多様に配

20 Patel, p. 182; 183; 185.

21 Nationalpolitische Lehrgänge für Schüler. Denkschrift des Oberpräsidenten der Rheinprovinz (Abteilung für höheres Schulwesen). Frankfurt am Main: M. Diesterweg, 1935, S. v.

22 小峰「ライン地方のあるギムナジウム (3)」[民族政治科実習], 参照。

23 Vgl. Kraas (2011); 小峰「ラガー (Lager) —ナチス「キャンプと隊列の教育」の展開—」。

備されたのだった。クラスは、生徒用「民族政治科実習」や「教員再教育」(Umschulung der Lehrerschaft) ラガー, ユーターボーク (Jüterbog) の法学者協同ラガー [ベルリン南西, ブランデンブルク州], アルト・レーゼ (Alt Rehse) のドイツ医師団指導者学校の教育ラガー [メクレンブルク=フォアポンメルン州ノイブランデンブルク], 大学私講師ラガー, さらにはナチ党ラガー, ナチ党諸機関・党連携諸機関のラガーにまで及ぶ80種類以上のラガーを挙げている<sup>24</sup>。

## ②「学校田園寮」

そして、「国家労働奉仕団 (Reichsarbeitsdienst: RAD)」の団体生活に酷似しているのが、「学校田園寮」(Schullandheim) である。学校田園寮は、元々はギムナジウム (男子中等学校) が所有しないし賃借するする田園宿舎であって、生徒たちはここに夏ないし冬に約2週間滞在し、教師・生徒・援助者の生活協同体を形成して土地の自然や田舎の人々の暮らしに触れ、これを深め、また学習とスポーツ, 音楽, 芸術活動を展開したのである。それは都市の〈学校〉での文化伝達教育を補うもの (子どもの「こころと体の全体的発達」として20世紀初頭からワイマール時代にかけて発展して行った「新教育」Reformpädagogik の教育機関であった (ワイマール時代末にはドイツ全体で約250寮に達している。女学校, 初等学校にも拡大)<sup>25</sup>。

それが、ナチ時代になると他の「新教育」が弾圧終息させられたのに対して、学校田園寮はヒトラーの「認知」を受け、最終的には430寮以上にまで増加したのだった。私はその増大理由は、学校田園寮が〈ラガー教育〉を本旨とする〈ナチス教育〉の正系となり (= 〈ナチス学校田園寮〉), 学校と教育のナチス化を牽引したためだと考えている<sup>26</sup>。

## ③錬成講習

各種職業集団の「錬成講習」(Schulungslehrgänge) では、いずれもこのようなラガー教育が展開されている。中でも、〈ナチス教育〉推進の中心を担った「ナチス教員連盟」(Nationalsozialistischer Lehrerbund: NSLB) (1937年には、学校現場では教員の97%が「ナチス教員連盟」所属となっている<sup>27</sup>) においては、ナチス世界観錬成の〈ラガー教育〉が党・連盟一体となって実施されたのである<sup>28</sup>。

24 Kraas (2011), S. 314–317.

25 小峰『ベルリン新教育の研究』風間書房, 2002, 第9章, 参照。

26 ——「ナチスの学校田園寮 (1933-1945)」, 参照。

27 Eilers, Rolf: Die nationalsozialistische Schulpolitik: eine Studie zur Funktion der Erziehung im totalitären Staat. (Staat und Politik, Bd. 4), Westdeutscher Verlag, 1963, S. 74.

28 Vgl. Kraas (2011); Kraas (2004); 小峰「ナチス教員連盟」(1929-1943)について」『中京大学国際教養学部論叢』第12巻第2号, 2020/3, 参照。

### (3) 国民の積極的自己動員

パーテルの〈ナチス教育〉研究で今回私が最も注目するのは、〈ラガー教育〉は国民・若者を内面から積極的に自己稼働・自己動員させたという点である。国民・若者が自ら進んで「ナチス人間」となり、党（ナチ党）と国家を「自分の集団」、自身と不可分の存在としてこれに自己投企して行く——ナチスは国民にユートピア〈民族共同体〉（Volksgemeinschaft）を確信させ、その実現を自らの「喜び」とさせ得たのである（「…そうすれば彼らは、生きている限り二度と自由は望まない（拍手喝采）。彼らはそれを喜びとするのである」（ヒトラー：ライヒェンベルク演説）。〈ナチス教育〉、〈ラガー教育〉をそのような社会装置として理解するとき、本稿冒頭の「ドイツ国民はなぜ独裁者に熱狂したのか」への解が導かれると考える。

ここではそれに関し2点だけ指摘しておきたい。

#### ①ナチス新規教育機関

ナチス〈ラガー教育〉を先進的に推進したのは以下の〈ナチス新規教育機関〉であった。

- ①ナポラ（Nationalpolitische Erziehungsanstalt: NAPOLA, 民族政治教育舎）——1933から
- ②オルデンスブルク城（NS-Ordensburg, ナチス騎士団城）——将来の党幹部校1936から
- ③アドルフ・ヒトラー校（Adolf-Hitler-Schule: AHS）——ナポラに似るが、より一層党そのものに焦点。1937から

新規教育機関は、ヒトラーが批判した知識教育一辺倒の「学校」に対して、〈ラガー教育〉を目に見える形で提示した。これらの謂わば「パイロット学校」（小峰）は、若者や国民大衆に〈ナチス教育〉を具現化し、第三帝国の「新しい教育」を指し示す「範例の役割を果たした」のである<sup>29</sup>。ギムナジウム（Gymnasium）に代表される従来の中高等教育機関は、文字通り知識の詰め込みと外国語（ギリシア語・ラテン語の古典語および近代外国語）・外国文化偏重、人文教養の伝達所となっており、それら教育機関に修学できるのは中・上層エリートに限られていた。これに対してヒトラーは明瞭な対案を提起した。曰く、社会全体の教育、大衆の教育、〈民族共同体〉（Volksgemeinschaft）形成の教育、身体強化・体育重視、男女別学、ドイツ文化のカリキュラム（外国語は基本的に英語限定）、果敢な実行力を備えた人格の錬成、である。「新しい教育」は人々に近い「論理」からなる教育だった<sup>30</sup>。

29 Patel, p. 184.

30 ヒトラーは「実際に学問的教養はさしてないが、肉体的には健康で、善良で堅固な性格をもち、欣然とした決断と意志力に満ちた人間は、才知にめぐまれた虚弱者よりも、民族共同体にとってはより価値がある」と（ヒトラー、同上、p. 61）述べた。〈教養主義〉の近代教育を批判し教育の目的に〈ナチス教育〉を巧みに滑り込ませたのである（その帰結が軍隊を「祖國的教育の最後、最高の学校」とする兵営国家

〈ナチス新規教育機関〉は、この「ドイツ的教養」・「身体重視」の〈ラガー教育〉という教育の中身と共に、国民大衆に開かれ、社会的流動化を実現する教育機関という点においても「パイロット学校」たろうとした。これら〈ナチス新規教育機関〉が個々には問題点を抱えていたにせよ——①ナポラ：1941年に全32校。うち女子用3校のみ〈女子差別〉 ②オルデンスブルク城：3校連合カリキュラム実施上の困難 ③アドルフ・ヒトラー校：設立計画よりも少数に留まる——、今まで教養エリートの牙城だった「学校」に対してこれらが「国民大衆の〈学校〉」というユートピアを提示したことは間違いない<sup>31</sup>。

## ②積極的自己動員 (active self-mobilization) vs. 永続的テスト (permanent testing)

新規教育機関は教育方法的にはワイマール時代の「新教育」(Reformpädagogik)を継承して〈学び〉を主体化させたのだったが、他方「社会全体のナチ化」、ナチス価値の日常化は、国民取り分け若者を〈民族共同体〉(Volksgemeinschaft)という「ナチス・ユートピア」に「積極的自己動員」(active self-mobilization)させることになった。

「社会的流動性」を実現した〈民族共同体〉は開かれた「平等社会」である。これまでは教養層だけにエリートの道が開かれていたのだったが、ナチス社会においては「誰でも」エリートになり得た(「選別」[登用] positive selection (Auslese))。パーテルは特に次の事例を挙げている。

- ①ナポラ (NAPOLA, 民族政治教育舎) 生徒
- ②東方の「ドイツ女子同盟」(Bund Deutscher Mädel)
- ③「アーリア人」大学教授 (解職されたユダヤ人教授職ポストの後任)<sup>32</sup>

社会全体が〈民族共同体〉 = 「ナチス・ユートピア」建設に向かうなか、若者は「体制の目指

---

の教育であった)。この呼びかけは〈教養主義〉の教育とは無縁の庶民大衆——敗戦と失業、天文学的インフレーションに苦しむ「小市民」——の不満に合致したのである。

31 これら「パイロット学校」の役割については山本 尤『ナチズムと大学——国家権力と学問の自由』, 中公新書, 1985, p. 165-168. が詳しい。同書は「共同体キャンプ」についても早くから注目していた。(同書, p. 158-164.)

なお、戦後ドイツのナチス教育研究を牽引したハラルド・ショルツ(Prof. Dr. Harald Scholtz, 1930-2007: 故人。元ベルリン自由大学教授(1971-1995))は1942-45にナチ党幹部養成校「アドルフ・ヒトラー校ヴェストマルク」(Adolf-Hitler-Schule Westmark)に学んでいる。戦後はベルリンのギムナジウムを経てベルリン自由大学、チュービンゲン、ゲッチンゲン、エジンバラ(英国)の各大学に学び教師、研究者となった。(「Prof. Dr. Harald Scholtz」<http://www.hs-b.de/> 参照。最終閲覧: 2015/12/02)

32 Patel, p. 192. ③については、a) 伝統大学におけるユダヤ人教授追放と共に、b) 新設の「教員養成大学」(Hochschule für Lehrerbildung: HLB)で「人種学」のナチ党員教授が多数雇用されたという事実がある。ハルテンらの書はこれについて次のように述べている。

「『人種生物学』(Rassenbiologie)の制度化と、これら大学教授たちが教員養成大学に制度化[就任——小峰]したことは、第三帝国の最重要の大学『革新』に属する」と。Harten, S. 552. (裏表紙, 本書紹介)



す価値心情を積極的に信奉し、「自分から」「ナチス目標」に応えようとする。パーテルは言う。

「ナチス目標への積極的自己動員（active self-mobilization）＝これは、受動的トップダウン教育、インドクトリネーション [indoctrination 教化（洗脳）] よりもはるかに重要であった」<sup>33</sup>と。

若者の情念をナチス目標に「積極的自己動員（active self-mobilization）」させたものこそ「ラガー」の最大の効果と言える。

しかし他方、この〈ナチス社会〉は、〈民族共同体〉に同調できぬ「劣等者（inferiors）」を見つけ出そうとする「永続的テスト（permanent testing）」社会である（「排除」（exclusion (Ausmerze)）。人々は「ドイツ人人口の10-30%」の「劣等者」とならぬよう、常にナチ的行動スタイルが求められる。この二律背反（ナチス価値への積極的自己動員と劣等者判定恐怖）が、「ナチス体制の重要性であり、かつ稼働力」ともなっていた<sup>34</sup>。

このような〈ナチス社会〉を、パーテルは次のように総括する（大要）。

「これらのすべてに因り [①積極的自己動員 ②常時行動監視 ③劣等者判定恐怖]、多くのドイツ人取り分けナチス教育システムを通り抜けた若者たちは1944/45までナチス体制を支持したのだと言える。」<sup>35</sup>

#### （4）キラン・クラウス・パーテルとナチス教育研究

キラン・クラウス・パーテル（Kiran Klaus Patel, 1971-、51歳）は、ドイツ＝イギリス系（元々の出自はインド系）の歴史家で、現在ミュンヘン大学ヨーロッパ史（19、20世紀）教授、ヨーロッパ・プロジェクト館長である。

これまでマーストリヒト大学（オランダ）、フィレンツェ大学（イタリア）、フンボルト大学（ドイツ・ベルリン）の教員を歴任、マーストリヒト大学時代（2011-2019）にはヨーロッパ・グローバル史教授・歴史部門長を務めた。このとき、EUに関する優れた研究者に与えられる「ジャン・モネプログラム（Jean Monnet Programm）奨励教授」となっている（2015-2019）<sup>36</sup>。

33 Patel, ebenda.

34 「排除」と「永続的テスト」の「共同体」は、わが国前近代の「村落共同体」を想起させる。（川島 武宣『日本社会の家族的構成』、岩波現代文庫、2000；遠藤 周作『沈黙』、新潮文庫、1981、参照）

35 Patel, ebenda.

36 「Kiran\_Klaus\_Patel」（ミュンヘン大学 HP）[https://www.ngzg.geschichte.uni-muenchen.de/personen/l\\_s\\_patel/prof\\_dr\\_kiran\\_patel/index.html](https://www.ngzg.geschichte.uni-muenchen.de/personen/l_s_patel/prof_dr_kiran_patel/index.html) 最終閲覧：2022/01/15；「Kiran\_Klaus\_Patel」（ドイツ Wikipedia）[https://de.wikipedia.org/wiki/Kiran\\_Klaus\\_Patel](https://de.wikipedia.org/wiki/Kiran_Klaus_Patel) 最終閲覧：2022/01/15；「Jean Monnet Programm」[https://de.wikipedia.org/wiki/Jean\\_Monnet\\_Programm](https://de.wikipedia.org/wiki/Jean_Monnet_Programm) 最終閲覧：2022/01/15 参照。

ベルリン・フンボルト大学に提出した学位論文は、ナチ時代ドイツの国家労働奉仕団（Reichsarbeitsdienst: RAD）と米国の市民保全部隊（Civil Conservation Corps）の比較研究という。今日パーテルは米欧を行き来しながら研究を展開し、成果を独文、英文で刊行している<sup>37</sup>。こうした寸描から窺えるようにパーテルはドイツ現代史研究の俊英で、研究視野の広さと掘り下げは群を抜いていると言ってよい。

私はこの度、ナチス教育の最重要人物の一人ルドルフ・ベンツェ（Rudolf Benze, 1888-1966）を調べる中でパーテルの文献に行き着いた<sup>38</sup>。

37 同上参照。

38 ルドルフ・ベンツェ（Rudolf Benze, 1888-1966）

- ドイツの教育者、ナチス帝国教育省参事官、SS幹部。
- ブラウンシュヴァイク生。カントールの家。第一次世界大戦に従軍。改革実科ギムナジウム教師、校長。1931ナチス教員連盟に加盟し中等学校部門長。1932ナチ党入党。
- 1933.7. プロイセン文部省（Preußische Kultusministerium）報告官。1934帝国教育省（Reichserziehungsmministerium）へ。教育相ルスト（Bernhard Rust, 1883-1945）の下で教育省参事官。「人種学」に基づくラディカル改革を担う。・生物＝中心教科、外国諸語制限＝英語特化。・教科書担当、ヒトラーユーゲント連隊指導者、・1938中央教育研究所長。教員継続教育を人種学原理で。ナポラ（NAPOLA：民族政治教育舎）指揮。イスタンブールのドイツ人学校弁務官。
- 戦後1947英軍により逮捕。釈放後郷土史家。ベスタロッツ協会所属、ガウス協会共同創設。（参照：「Rudolf Benze」[https://de.wikipedia.org/wiki/Rudolf\\_Benze](https://de.wikipedia.org/wiki/Rudolf_Benze) 最終閲覧：2022/02/26）  
見られるように、ベンツェは1932年にナチ党に入党したナチ党古参党员であり、本文で触れられているようにナチス教育政策・教員政策をすすめた中心人物の一人である。

ところでハルテン他（著）『第三帝国の教育イデオロギーとしての人種衛生学』「3章4節 ナチス教員連盟活動家と教育行政エキスパート」（ハルテン執筆）によれば、ナチ党は1931年、ブラウンシュヴァイク自由州でデイトリヒ・クラッグス（Dietrich Klagges, 1891-1971）を教育教授部門トップに任命。これを契機にベンツェは党内外で厚遇されて行った由である。

この記述から私は、ベンツェとブラウンシュヴァイク（市・自由州）、そしてヒトラーとの関係に注目せざるを得ない。すなわち、ベンツェは当時故郷ブラウンシュヴァイクの改革実科ギムナジウム一級教員（Studienrat）を経て西隣州（ニーダーザクセン州バート・ガンダースハイム（Bad Gandersheim））のギムナジウム校長だったのだが、1932年〔44歳〕、ブラウンシュヴァイク市に戻され市学校・文化課長（Stadtrat zum Leiter des Schul- und Kulturreferats der Stadt Braunschweig）となっている。

Vgl. Hans-Christian Harten/Uwe Neirich/Matthias Schwerendt: Rassenhygiene als Erziehungsideologie des Dritten Reichs: Bio-bibliographisches Handbuch. Berlin: Akademie Verlag, 2006. (edition bildung und wissenschaft, Band 10), S. 217-219.

ベンツェを招聘したクラッグスは、東隣州（ザクセン＝アンハルト州）でナチ党活動のため中間学校教頭を解職され、のちブラウンシュヴァイクに入って党プロパガンダ活動。やがて同州でのナチ党危機に際しヒトラーの直接介入を得て内務・国民教育担当大臣となっていた（1931年9月15日。その後1933年から1945年までブラウンシュヴァイク自由州首相）。このクラッグスこそ、同州においてヒトラーのドイツ国籍取得（1932年2月26日）を実現した人物である。ベンツェの同州着任（1932年）は恐らくヒト



『ナチスドイツ・ハンドブック』はナチスドイツの思想、統治構造、経済・文化、民族・帝国主義・ジェノサイド、ナチズム遺産、の5部にわたりナチスドイツ社会の解明を試みた斬新な一書である(全37論文、計664ページ)。パーテルの論文はそれの第二部「統治構造」の中に収められている。本研究は、分量はコンパクトながら(全17ページ)、これまでのナチス教育研究を押さえ、それらの多くが前提としている「断罪主義」的解明を克服し、〈ナチス教育〉の特徴、前代との連続と新規機構、〈ナチス教育〉がなぜ国民に受容されたのか、またその理想と現実を、幅広い視野と連関の中で——特に〈キャンプ〉に注目して——解明したところに大きな意義がある。

2018年の刊行であるから、これは〈ナチス教育〉研究の中では最新の部類に属するだろう。英文献であるが、本書は今後の〈ナチス教育〉研究に欠かせないと考え、紹介した次第である。

## 文 献

1. Eilers, Rolf: Die nationalsozialistische Schulpolitik: eine Studie zur Funktion der Erziehung im totalitären Staat. (Staat und Politik, Bd. 4), Westdeutscher Verlag, 1963.
2. Feiten, Willi: Der Nationalsozialistische Lehrerbund. Weinheim/Basel: Beltz, 1981.
3. Harten, Hans-Christian/ Neirich, Uwe/ Schwerendt, Matthias: Rassenhygiene als Erziehungsideologie des Dritten Reichs: Bio-bibliographisches Handbuch. Berlin: Akademie Verlag, 2006. (edition bildung und wissenschaft, Band 10)
4. König, Karlheinz: „Schullandheimbewegung und Schullandheimpädagogik im Griff des totalitären Staates (1933–1945)“. In: Verband Deutscher Schullandheime (Hrsg.): Schullandheimbewegung und Schullandheimpädagogik im Wandel der Zeiten. Hamburg: Verband Deutscher Schullandheime e. V., 2002.
5. Kraas, Andreas: „Den deutschen Menschen in seinen inneren Lebensbezirken ergreifen — Das Lager als Erziehungsform, 2011.“ In: Klaus-Peter Horn/Jörg-W. Link (Hrsg.): Erziehungsverhältnisse im Nationalsozialismus. Bad Heilbrunn: Klinkhardt, 2011. [Kraas (2011)]
6. ———: Lehrerbüro 1932–1945: politische Funktion und pädagogische Gestaltung. Bad Heilbrunn: J. Klinkhardt, 2004. [Kraas (2004)]
7. Nationalpolitische Lehrgänge für Schüler. Denkschrift des Oberpräsidenten der Rheinprovinz (Abteilung für höheres Schulwesen). Frankfurt am Main: M. Diesterweg, 1935.
8. Patel, Kiran Klaus: „Education, Schooling, and Camps“. In: Shelly Baranowski et. al. ed.: A Companion to Nazi Germany. Hoboken, New Jersey, U. S. A.: Wiley Blackwell, 2018.
9. アドルフ・ヒトラー、平野 一郎／将積 茂訳『わが闘争』下、角川文庫、1973.
10. 池内 紀『ヒトラーの時代』、中公新書、2019.
11. 遠藤 周作『沈黙』、新潮文庫、1981.

---

ラーの「国籍取得」後のことであつたと思われるが(同じ1932年だが、ベンツェの場合は校長だったので年度末を俟つての異動であろう)、私には、すでにこの頃からブラウンシュヴァイクにおいて、クラッゲスを軸に「ヒトラー＝クラッゲス＝ベンツェ」という〈ナチス教育〉の人的パイプが築かれて来たように思われる。

参照:「Dietrich Klagges」[https://de.wikipedia.org/wiki/Dietrich\\_Klagges](https://de.wikipedia.org/wiki/Dietrich_Klagges) (最終閲覧:2022/02/28); 「ディートリヒ・クラッゲス」<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%87%E3%82%A3%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%AA%E3%83%92%E3%83%BB%E3%82%AF%E3%83%A9%E3%82%B2%E3%82%B9> (最終閲覧:2022/02/28)

12. 石田 勇治『ヒトラーとナチ・ドイツ』, 講談社新書, 2015.
13. 川島 武宜『日本社会の家族的構成』, 岩波現代文庫, 2000.
14. 小峰 総一郎『ベルリン新教育の研究』, 風間書房, 2002.
15. ———『ナチスの教育 ——ライン地方のあるギムナジウム——』, 学文社, 2019.
16. ———「ライン地方のあるギムナジウム (3)」『中京大学国際教養学部論叢』第8巻第1号, 2015/9.  
[民族政治科実習]
17. ———「ライン地方のあるギムナジウム (6・完)」『同』第9巻第2号, 2017/3. [ナチス教育学]
18. ———「ラガー (Lager) —ナチス「キャンプと隊列の教育」の展開—」『同』第10巻第1号, 2017/10.
19. ———「ナチス教員連盟」(1929-1943) について』『同』第12巻第2号, 2020/3.
20. ———「ナチスの学校田園寮 (1933-1945)」『中京大学教養教育研究院論叢』第1巻第1号, 2020/10.
21. 山本 尤『ナチズムと大学——国家権力と学問の自由』, 中公新書, 1985.

#### URL

1. 「Dietrich Klagges」[https://de.wikipedia.org/wiki/Dietrich\\_Klagges](https://de.wikipedia.org/wiki/Dietrich_Klagges) 最終閲覧：2022/02/28
2. 「Jean Monnet Programm」[https://de.wikipedia.org/wiki/Jean\\_Monnet\\_Programm](https://de.wikipedia.org/wiki/Jean_Monnet_Programm) 最終閲覧：2022/01/15
3. 「Kiran\_Klaus\_Patel」[https://de.wikipedia.org/wiki/Kiran\\_Klaus\\_Patel](https://de.wikipedia.org/wiki/Kiran_Klaus_Patel) 最終閲覧：2022/01/15
4. 「NS-Ordensburg」<https://de.wikipedia.org/wiki/NS-Ordensburg> 最終閲覧：2022/02/26
5. 「Prof. Dr. Harald Scholtz」<http://www.hs-b.de/> 最終閲覧：2015/12/02
6. 「Prof. Dr. Kiran Klaus Patel」[https://www.ngzg.geschichte.uni-uenchen.de/personen/ls\\_patel/prof\\_dr\\_kiran\\_patel/index.html](https://www.ngzg.geschichte.uni-uenchen.de/personen/ls_patel/prof_dr_kiran_patel/index.html) 最終閲覧：2022/01/15
7. 「Rudolf Benze」[https://de.wikipedia.org/wiki/Rudolf\\_Benze](https://de.wikipedia.org/wiki/Rudolf_Benze) 最終閲覧：2022/02/26
8. 「ディートリヒ・クラゲス」<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%87%E3%82%A3%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%AA%E3%83%92%E3%83%BB%E3%82%AF%E3%83%A9%E3%82%B2%E3%82%B9> 最終閲覧：2022/02/28

(2022. 3. 29)